

日本の中学校に在籍する在日外国人および帰国子女18名から見た 日本の小集団閉鎖性についての試験的分析

吉村 斉¹

A Trial Analysis on 18 Students of Foreign Residents or Returnee Having Impressions of the Other Small Japanese Groups with Exclusive Attitudes at Junior High School

Hitoshi YOSHIMURA¹

Abstract: This study examines 18 students of foreign residents or returnee having impressions of small Japanese groups with exclusive attitudes at junior high school. The research was conducted by means of a questionnaire and the following results were obtained. Many of the participants have an impression of Japanese students with exclusive attitudes relatively stronger than they had in the other countries. Particularly, they think that Japanese have tendency to prefer association with specific friend to participation in group activities. It is likely that the exclusive attitudes shown by a small group have a great influence to members of the other group, particularly on an adjustment of foreign residents or returnee students to school lives in Japan.

Keywords: Exclusive attitude • Foreign residents • Returnee students

問 題

集団は複数のインフォーマルな小集団が集まって形成されている。インフォーマルな集団は、そこに帰属したいメンバーが集まることから凝集性も高い。小集団の凝集性が強まれば、次第に小集団間の差別化が生じ、他の小集団に対して閉鎖的になることが予想される。気の合う者同士によって形成された小集団で閉鎖的になる傾向（以下、小集団閉鎖性）が強い場合、小集団間の対立を招き、人間関係が分裂する恐れもある。それゆえ、フォーマルな集団（例えば学級集団や職場集団など）における生活は居心地が悪くなり、不適応を招くこととなる。

この問題について、中学生を対象にした吉村

（2005，2007）によると、小集団閉鎖性が強い生徒の集団生活全体への満足感や課題へのモラルは、弱い生徒に比べて低かった。小集団閉鎖性が、学校適応を規定していると推察される。また、総務庁青少年対策本部（1998）によれば、日本の青年は、知らない人や自分とは違った考えを持っている人との関わりが、欧米の青年に比べて消極的であることが示唆されている。大野木（1993）においても、帰国にあたって、もっとも不安に感じることは帰国後の友人関係や団体生活であった。それゆえ、各国と比較した場合、日本の友人関係と団体生活のあり方には特徴的な性質があると考えられる。とりわけ、彼／彼女らが小集団閉鎖性に気づき、そ

¹〒780-0955 高知市旭天神町292

高知学園短期大学 幼児保育学科 . E-mail: hyoshimura@kochi-gc.ac.jp

Department of Early Childhood Education and Care, Kochi Gakuen College, 292 Asahi Tenjin-cho, Kochi 780-0955, Japan

れに適応していくことが、日本での生活そのものに適応する出発点であると考えられる。

しかし、外国で生活した後、日本で新たな生活を始めた人々、すなわち外国に籍をおく子どもや帰国子女の不安と、小集団閉鎖性に関連はあるのだろうか。この問題が把握されれば、彼／彼女らの悩みの原因を理解し、適切な指導方法を考える上で、たいへん意義がある。そこで、本研究では、外国での生活経験があり、日本の中学校に在籍する生徒を対象に小集団閉鎖性に対する印象を調査することとする。

ところで、青年期までの仲間関係は、個々に展開される異性関係を除いて、基本的には同性による集団内で展開されることが多くなる。この同性の友人関係の展開は男女間で異なることが、多くの研究で指摘されている。発達の観点では、斉藤・木下・朝生(1986)が、幼児期の仲間関係を検討している。その概要は、男児は1人の強力な勢力者が存在し、その下に強さの異なる追従者が順序づけられる構造となっている。それに対して、女児には男児ほど強力な勢力者はいない。女児全体が男児から圧力をかけられることから、クラスの中心的役割を担う勢力者とは距離を置いていることが考えられるという。児童期を対象として検討したEder & Hallinan(1978)によると、小学高学年では、男子は第三者との間に何らかのつながりが生ずると、次第に第三者を取り込んだ親密な三者関係へと発展するケースが多いが、女子にはみられない。この傾向は中学生においても同様である。中学生の対人関係の構造を研究した楠見(1986)によると、男子の集団は中心と周辺が明確で多くのメンバーが何らかのつながりをもっている。しかし、女子はサブ・グループ内のメンバーの結びつきが強いため、外のメンバーとの関わりが少ないという。したがって、男子は幼児期からリーダーを中心に、外に開かれた流動性のある仲間関係を経験しているのである。それに対して女子は情緒で結びついた、狭いが深い友人関係の経験を積み、リーダーを中心とした大きな集団組織の経験は浅いことが示唆される。

青年期では、仲間関係の展開の違いも指摘さ

れている。和田(1996)によると、青年期の男子は、同性友人に共行動、情報、類似を期待する傾向が強い。一方、女子は自己開示、自己向上、尊重を期待している。例えば、スポーツについて話すことは男性の特徴である(Aries & Johnson, 1983)。Sherrod(1989)によると、男性は同じことをするのが好きな人を親友に求めている。これに対して、女子同士の友人関係では、個人的な問題や家族についてお互いに話すことが多い(Wheeler & Nezlek, 1977)。女子は、物事について同じように感じてくれる人を親友に求めている(Sherrod, 1989)。こうして形成された友人関係は、学校生活にとどまらず、遊びや余暇でも展開される可能性が高い。つまり、女子の集団内で形成されたインフォーマルな小集団は、男性に比べて凝集性が強いだけでなく、他の小集団のメンバーに対して閉鎖的になることが考えられるのである。実際に上瀬(2000)は、女子の場合、小集団内の友達関係が分裂してしまえば、友達関係すべての崩壊につながる恐れがあると述べている。女子大学では小集団に入れないと死活問題に関わるという報告もある(中川, 2000)。青年女子にとって、小集団の人間関係が学校生活における最大の関心事であると推察される。その過程が集団力学における性差の要因の1つとして表れるのではないだろうか。

このように、青年期の同性友人との関係は男女間で異なる傾向にあるといえる。とりわけ、女子に小集団閉鎖性の傾向が見られることが示唆されている(上瀬, 2000; 中川, 2000)。本研究においても、外国での生活を経験した帰国子女や在日外国人が、外国と日本の集団生活を通し、小集団閉鎖性をどのように捉えているかは、わが国の中学生の仲間関係に対する捉え方を把握する上で、きわめて重要と思われる。そこで、彼／彼女らに対して、小集団閉鎖性の特徴が日本にあてはまると思うか、それとも自身が生活していた外国にあてはまると思うかを質問して、日本の小集団閉鎖性を探索的に検討する。次に、その回答に性差があるか否かを検討することとする。なお、日本の学校生活と小集

团的閉鎖性の関係が明らかでないことから、今のところ、この問題に関する特定の仮説を設定するだけの理論的根拠がない。そのため、試験的分析とし、仮説は設定せずに検討を進める。

方 法

調査対象者 A、B両県に在住する公立中学校8校の1年生18名(男子10名、女子8名)で、いずれも外国での生活を体験したことがある者であった。対象者選出にあたっては、1年未満の海外生活や留学を目的とした海外生活は、分析の対象から外した。各対象者が生活した時期や国名などの概要は以下の通りである。

1. 女子。0歳から10歳まで台湾で過ごした。現居住地には台湾から移住した。

2. 女子。0歳から11歳まで中華人民共和国(以下、「中国」と略記)で過ごした。現居住地には中国から移住した。

3. 女子。7歳から10歳まで中国で過ごした。現居住地には中国から移住した。

4. 女子。1歳から10歳まで台湾で過ごした。現居住地には台湾から移住した。

5. 男子。0歳から5歳まで中国で過ごした。中国から同じ県内に移住し、その後現居住地で過ごすようになった。

6. 男子。0歳から8歳まで中国で過ごした。現居住地には中国から移住した。

7. 男子。0歳から12歳までニカラグアやコスタリカで過ごした。現居住地にはコスタリカから移住した。

8. 女子。3歳から8歳までオランダやスコットランドで過ごした。帰国に際しては一度県外に移り、その後現居住地で過ごしている。

9. 女子。0歳から11歳まで中国で過ごした。現居住地には中国から移住した。

10. 男子。1歳から7歳まで中国で過ごした。現居住地には中国から移住した。

11. 男子。0歳から3歳までフィリピンで過ごした。帰国後、同じ市内から現居住地に移住している。

12. 男子。5歳から7歳までマレーシアで過ごした。帰国に際しては一度県外で過ごし、そ

の後現居住地に移った。

13. 男子。4歳から10歳までアメリカで過ごした。現居住地にはアメリカから移住した。

14. 女子。4歳から6歳、および11歳から12歳までドイツとフランスで過ごした。現居住地にはフランスから移住した。

15. 男子。10歳時の1年間、アメリカで過ごした。帰国に際しては一度県外で過ごし、その後現居住地に移った。

16. 男子。10歳から13歳まで中国で過ごした。現居住地には中国から移住した。

17. 男子。在日中国人で0歳から9歳まで中国で過ごした。中国から来日して、そのまま現居住地で過ごしている。

18. 女子。在日中国人で8歳から13歳まで中国で過ごした。中国から来日して、そのまま現居住地で過ごしている。

手 続

(1) 質問項目の作成 中学生の小集団閉鎖性を検討した吉村(2005,2007)の尺度を参考に、同調し気を遣いながら、特定の友人との付き合いに限定され、他の小集団の仲間に対して閉鎖的になる行動や態度に関する101項目を用いた(Table 1参照)。なお、事前に協力校で調査目的と手続きを説明し、調査によって対象者の心理的不安を煽ることがないこと、匿名性が守られるように配慮することを注意しながら、所属校の代表者と調整を図った上で、許可を得た。

すべての項目に対して「外国によくあてはまる」、「外国にだいたいあてはまる」、「どちらもかわらない」、「日本にだいたいあてはまる」、「日本によくあてはまる」までの5件法で回答させた。

(2) 調査の実施 2002年11月から12月にかけて、調査を実施した。調査は、ホームルームなどの時間を利用して、担任教師によって行われた。その際、どうしても回答したくない場合は、無理に求めないことを条件とした。

結 果

項目のカテゴリー化 調査で用いた質問項目を類似した項目同士でまとめるため、Table

1の3つのカテゴリーに分類した。第1は、「特定の友達との付き合いを優先している」など、小集団内の友達付き合いを優先する行動や態度に関する5項目であった。これらを「小集団」のカテゴリーと命名した。Cronbachの α 係数は.90であった。第2は、「一度仲良しグループを作ると、他のグループの人と深く付き合いおとしない」など、閉鎖的な行動や態度に関する4項目であった。そこで、「閉鎖性」のカテゴリーと命名した。 α 係数は.90であった。最後に、「自分の考えを述べるより、他の友達の意見に合わせる人が多い」の1項目を「同調」のカテゴリーとした。 α 係数より、複数項目間の内的整合性は保たれていると判断された。

各項目に対する回答の割合 各項目に対して、調査対象者の回答がどのように分布しているかを検討するために、まずは5つの回答項目を3つに分類した。具体的には、「日本によくあてはまる」と「だいたい日本にあてはまる」の2つを肯定回答として「日本にあてはまる」に、「外国によくあてはまる」と「だいたい外国にあてはまる」を否定回答として「外国にあてはまる」に、「どちらともいえない」はそのままとした。次に、この3つの回答項目の出現数と出現率を算出した（Table 1）。以下では、各項目の結果に基づいて若干の考察を進める。

(1) 小集団に関する項目 まず、「特定の友達との付き合いを優先している」については、肯定回答が10人（55.5%）で、否定回答が5人（27.8%）であった。すなわち、過半数の対象者が「日本にあてはまる」と回答していた。

次に、「陰口を言う人が多い」については、「どちらともかわらない」とする回答は6人（33.3%）であったが、それ以上の7人（38.9%）が「日本によくあてはまる」と回答していた。「日本にだいたいあてはまる」とあわせた肯定回答が、8人（44.5%）の一方、否定回答は4人（22.2%）と大きな差が見られた。

さて、「大きな集団（例えばクラス）より、特定の友達で作る集団を大切にしている」については、「どちらともかわらない」とする回答がもっとも多かった（7人、38.9%）。また、肯

定回答が6人（33.3%）、否定回答が5人（27.8%）とほぼ同じであった。

「他の仲良しグループに入っていくのが難しい」についても、「どちらともかわらない」とする回答がもっとも多かった（6人、33.3%）。また、肯定回答（7人、38.9%）と否定回答（5人、27.8%）に大きな差も見られなかった。

「グループ内でよく喋っても、他のグループの人とはあまり喋らない人が多い」については、7人（38.9%）が「どちらともかわらない」と回答していたが、肯定回答が7人（38.9%）、否定回答が4人（22.2%）にわかれていた。肯定回答と「かわらない」とする回答が同数で、否定回答は少ない傾向が見られた。

小集団に関する5項目の項目あたりの平均出現数は、肯定回答が42.2%でもっとも高かった。

(2) 閉鎖性に関する項目 まず、「グループ同士の付き合いより、グループの中での友達との付き合いが多い」については、7人（38.9%）が「どちらともかわらない」と回答していた。ただし、肯定回答が8人（44.4%）と、半数近くが肯定的に回答していた。

「他の人との付き合いを避ける」についても、「どちらともかわらない」とする回答がもっとも多かった（7人、38.9%）。ただし、肯定回答も7人（38.9%）であったこと、否定回答は4人（22.2%）であった。

「一度仲良しグループを形成してしまうと、さらに友達を増やそうとしない人が多い」については、8人（44.4%）が「どちらともかわらない」と回答していた。肯定回答が6人（33.4%）、否定回答も4人（22.2%）と大きな差はなかった。

同様に、「一度仲良しグループを作ると、他のグループの人と深く付き合いおとしない」においても8人（44.4%）が「どちらともかわらない」と回答していた。肯定回答が6人（33.4%）、否定回答が4人（22.2%）と大きな差はなかった。

閉鎖性に関する4項目についても、「どちらともかわらない」と回答した割合が多かった。しかし、肯定回答（37.5%）は否定回答（20.8%）より高かった。

Table 1 各質問項目に対する回答の出現数と出現率（%）

質問項目	肯定回答	どちらかわからない	否定回答
	日本にあてはまる		外国にあてはまる
I 小集団			
特定の友達との付き合いを優先している	10(4, 6) (55.5%)	3 (16.7%)	5(3, 2) (27.8%)
陰口を言う人が多い	8(7, 1) (44.4%)	6 (33.3%)	4(0, 4) (22.2%)
大きな集団（例えばクラス）より、特定の友達で作る集団を大切にしている	6(3, 3) (33.3%)	7 (38.9%)	5(3, 2) (27.8%)
他の仲良しグループに入っていくのが難しい	7(4, 3) (38.9%)	6 (33.3%)	5(1, 4) (27.8%)
グループ内でよく喋っても、他のグループの人とはあまり喋らない人が多い	7(4, 3) (38.9%)	7 (38.9%)	4(2, 2) (22.2%)
平均	7.60 (42.2%)	5.80 (32.2%)	4.60 (25.6%)
II 閉鎖性			
グループ同士の付き合いより、グループの中での友達との付き合いが多い	8(4, 4) (44.4%)	7 (38.9%)	3(0, 3) (16.7%)
他の人との付き合いを避ける	7(2, 5) (38.9%)	7 (38.9%)	4(1, 3) (22.2%)
一度仲良しグループを形成してしまうと、さらに友達を増やそうとしない人が多い	6(3, 3) (33.3%)	8 (44.4%)	4(1, 3) (22.3%)
一度仲良しグループを作ると、他のグループの人と深く付き合おうとしない	6(5, 1) (33.3%)	8 (44.4%)	4(1, 3) (22.3%)
平均	6.75 (37.5%)	7.50 (41.7%)	3.75 (20.8%)
III 同調			
自分の考えを述べるより、他の友達の意見に合わせる人が多い	8(4, 4) (44.4%)	5 (27.8%)	5(3, 2) (27.8%)

$N=18$ 、「日本にあてはまる」の出現数の（ ）内左は「日本によくあてはまる」の出現数、右は「だいたい日本にあてはまる」の出現数である。「外国にあてはまる」の（ ）内左は「だいたい外国にあてはまる」の出現数、右は「外国によくあてはまる」の出現数である。

(3) 同調に関する項目 他方、「自分の考えを述べるより、他の友達の意見に合わせる人が多い」については、肯定回答が8人(44.4%)と半数近くを占めていた。ただし、否定回答も5人(27.8%)であった。

各項目に対する男女間の回答の比較 次に、各項目に対する回答の性差を検討するために、すべての項目の回答に対して「外国によくあてはまる・1点」、「外国にだいたいあてはまる・2点」、「どちらかわからない・3点」、「日本に

だいたいあてはまる・4点」、「日本によくあてはまる・5点」と得点化した。次に、3つのカテゴリーの項目あたりの平均値を尺度得点として、これらを従属変数、性別を独立変数として、*t*検定(有意水準は $\alpha = .05$)を行った。しかし、小集団($t(14) = .04, n.s.$, 男子: $M = 3.28, SD = 1.19$, 女子: $M = 3.25, SD = 1.17$)、閉鎖性($t(14) = .52, n.s.$, 男子: $M = 3.28, SD = 1.18$, 女子: $M = 3.13, SD = 1.13$)、同調($t(14) = .71, n.s.$, 男子: $M = 3.13, SD = 1.46$, 女子: $M = 3.50, SD = 1.41$)のいずれにおいても性差は認められなかった。

考 察

本研究では、日本の中学校に在籍している在日外国人と帰国子女の計18名を対象に、小集団閉鎖性に対する印象を検討した。以下では、得られた結果について考察を進める。あわせて、そこから推察される多くの現象や今後追究すべき課題についても考察する。

本研究の第1の目的は、帰国子女や在日外国人の中学生が、日本の小集団閉鎖性に対してどのように捉えているのかを把握することであった。全体的に、各項目における印象度は「どちらかわからない」とする回答が多かった。本来、小集団を形成する傾向は、青年期前期の特徴である(Coleman & Hendry, 1999)。仲良しグループの存在そのものに対する違和感が大きくないとすれば、この結果は当然予想されたものである。その中で、「特定の友達との付き合いを優先している」については、半数以上が肯定的に回答していた。他にも44.4%の対象者が、「グループの中での友達との付き合いが多い」や「陰口を言う人が多い」、「他の友達の意見に合わせる人が多い」の項目に対して、肯定的に回答していた。すなわち、海外生活経験者は、日本における集団入りの難しさの原因として、閉鎖的な小集団の形成とそこでの同調や陰口に帰属していることが示された。このことは、既に形成された友人・仲間関係に入り込む余地が少なく、また自分の意見を主張しない生徒が多いことから、相互理解に発展する関係形成に苦労し

ていることを示唆するものである。とりわけ、直接自己表現しないにもかかわらず、陰口を言うケースに戸惑うため、彼／彼女らは自己抑制をすることで適応を図ろうとしている様相も推察される。

こうした傾向は生徒に限ったことではない。坂下(1988)によると、帰国子女が転入してきた学級担任教師においても、外国での生活を話さなくなって周囲に合わせる様子を見て、「ようやく生活に慣れた」と判断しやすい。一般に、日本人は集団主義の社会にいると感じる傾向にあるが、その実態は本来の集団主義から離れたものである(Yamagishi, 1988)。その理由として、日本人には、アメリカ人に比べて他者一般に対する信頼が低く、社会的ジレンマ状況で非協力的な行動をとりやすいことを挙げている。その結果、集団の利益を利用して自分自身に有利な結果をもたらすことを望んでいるとして、日本人の集団主義傾向を否定する見解も広がっている。本研究の回答からも、調査対象者が新たな集団入りをする場合、無意識に自己犠牲を求める雰囲気を感じたことが示唆される。この問題は、学級集団に限らず、大人を含む社会全体において存在していると推察される。

通常、同じ日本人であっても、転入生がクラスになじむまでは時間がかかるものである。しかし、本研究の結果は、排他的な雰囲気を感じた経験を表わすものであり、解決のためには時間以外の要因にも強く規定されることとなる。ファーカス・河野(1987)の調査によると、45.4%の帰国子女が帰国してつらかったこととして「いじめられた」ことを挙げていた。具体的には、「外人と呼ばれた」、「いじめられても先生が助けてくれなかった」などが含まれていた。坂下(1988)でも、帰国子女が「知っているも知らないふりをする暗い演技をしていた」、「目立ってはいけないと思えるだけ自己をおさえた」、「仲間に入れてもらうため、何にでもあわせた」ことを体験談として述べている。こうした背景と本研究の結果を照らし合わせると、帰国子女や在日外国人は、差別を連想させる排他的な集団関係に戸惑っていることも否め

ない。したがって、表面化しにくい日本の小集団閉鎖性への戸惑いを、周囲の生徒や担任教師が理解できるか否かが、帰国子女や在日外国人の学校適応を規定する要因であるといえる。

なお、本研究では、詳細な回答を求めることで、かえって調査対象者が学校生活への不安を高めることを危惧し、自由記述による回答は行わなかった。本研究の発展のためには、差別意識と小集団閉鎖性の印象との関連を明らかにすることが不可欠である。教育実践指導に生かすためには、倫理的な問題も考慮しながら、どの程度不安を感じたのか、その苦悩の原因、さらには様々な要因の因果関係を追究することが今後の課題となる。

本研究の第2の目的は、小集団閉鎖性の捉え方に性差があるか否かを把握することであった。従来の仲間関係に関する研究（上瀬，2000；中川，2000）を参考にすると、小集団閉鎖性は女子に見られやすいこと、それゆえ女子での影響力は強いことが示唆された。

しかし、本研究では、性差を認める結果は得られなかった。部活動を取り上げた吉村（2005）では、小集団閉鎖性と性別の交互作用が認められなかったことに対して、学級集団を取り上げた吉村（2007）では、小集団閉鎖性を含む対人行動と性別の交互作用が認められた。前者は、組織として統率された集団内での仲間関係であるが、後者は比較的自由的な雰囲気の中で展開される仲間集団である。在日外国人や帰国子女にとって、新しい日本の小集団閉鎖性に戸惑うことが男女共通の問題であるとするれば、仲間関係の発達とその性差は、仲間関係の形成後に明確化することも予想される。それゆえ、小集団閉鎖性の行動や態度がどのように展開されるのか、各要因の因果関係を検討することが課題となる。その因果関係が特定できれば、学校適応を促進する指導法も具体化されると期待される。

以上のことから、本研究で得られた知見は、日本の学級に対する帰国子女と在日外国人の不安として、閉鎖的な小集団の形成とそこでの同調や陰口への帰属が推察されること、これらの

不安は男女に共通するものであるといえる。すなわち、彼／彼女らの学校適応への不安に小集団閉鎖性が関係していることが示唆された。

ところで、本研究の調査対象者が居住した地域については、半数が中国であるなど、アジア圏が多かった。北山・唐澤（1995）によると、東洋文化では準拠集団の暗黙の期待の確認が自身の健康や自尊につながるという。すなわち、小集団を優先する態度は東洋全般に共通することも推察される。それゆえ、「日本にあてはまる」と回答する割合の大きい項目が少なかったのだろうか。もともとアジア圏からの帰国子女の約93%は、現地の日本人学校に通うなど、日本の集団生活を体験している傾向にある（大野木，1993）。これに対して北米圏では約75%が現地の学校に通うという。つまり、本研究の多くの対象者が日本の集団雰囲気を知った上で、日本の学校に通っていたとすれば、「どちらともいえない」の回答が多くなるのも当然だろう。対象者の外国での生活の様子と関連づけた検討が、今後の課題である。

一方、集団生活のあり方を安易にアジア圏とまとめることには慎重も要する。例えば、仲間関係の歪みが反映するいじめ問題において、日本と中国、韓国では違いがある。まず、日本では「みんなと調子を合わせないと嫌われる」と思っている被害者が多い（森田・滝・秦・星野・若井，1999）。つまり、日本の生徒自身も、小集団内で同調し、その結果閉鎖的な態度を取りやすい雰囲気になりやすい点で苦労しているのである。これに対して、中国ではいじめの側がいじめと認識せず、いじめられる側も黙ったままではない場合が多い（王，2004）。韓国では、暴力的なものが多いという（吉村，2004）。日本に比べると、中国も韓国も、いじめの形式は表面化しやすい特徴をもっている。すなわち、日本の学級集団では、小集団閉鎖性といじめ問題には深い関連があるにもかかわらず、それが表面化されにくいことを意味しているのである。

いじめに限らず、親の子どもに対する社会性の発達期待においても、日本と中国の違いが指

摘されている (Tobin, Wu, & Davidson, 1989)。それゆえ、同じアジア圏であっても、仲間関係の展開と発達が異なっている点が多いと思われる。人種・民族に対する意識が影響を及ぼしているのかもしれない。ファーカス・河野(1987)の結果より、たとえ同じ日本人であっても、居住した国の人種・民族に対する意識が般化することは考えられる。彼／彼女らは差別的な排斥に苦悩しているのだろうか。この問題は、海外子女にもあてはまる。まずは、アジアに限定して、小集団閉鎖性の捉え方を複数の国の間で比較することが優先すべき課題であると思われる。

また、本研究では、方法上の問題も残されている。例えば、調査対象者の過ごした国が統制されていないこと、来日／帰国後の地域が異なること、さらにサンプル数がわずかであったことから、このまま一般化することはできない。特に、調査対象者が18名と少なかったことから、対象者を増やして縦断的に分析することも課題といえる。その際、質問項目が適切であったかを確認することも求められる。例えば、本研究で用いた項目は、日頃無意識に行われていることも予想される。そのため、質問項目を見て即座に自らの行動や態度を内省することが難しかったことも考えられる。その結果、中心化傾向を招いたとすれば、他の方法と並行した検討も課題となる。無意識による行動であれば、質問紙法による測定方法で明らかにできる範囲は限界があることも否めない。少数の対象者に対してでも、面接を行いながら、彼／彼女らの真意を探る試みが求められる。

したがって、本研究の結果は参考程度にとどめておく必要がある。しかし、「どちらかわからない」を除いて肯定評価と否定評価を比較すると、すべての項目において肯定評価の割合が否定評価を上回っていた。このことは、カテゴリー別に集計した場合にもあてはまる。調査対象者は、日本と外国でも小集団閉鎖性はあるのだが、どちらかといえば、日本で気を遣いながらも、小集団を優先し閉鎖的になっている傾向が強いと感じたためであろうか。

近年の在日外国人の子どもは、外国人学校ではなく日本の学校へ通学することを希望するケースが急増している (大野木, 1993)。彼／彼女らが少しでも学校に適応しやすい環境を整備する上で、小集団閉鎖性の悩みを解決する体制が求められるといえる。

このように、本研究では多くの課題が残されている。本研究で取り上げられた問題は、調査の実施によって、当該生徒の不安を内省させることが懸念されてきた。それゆえ、留学生を対象にした研究に比べると、問題点の解決につながる検討が、期待されるほど進んでいない。特に、青年期の特徴である小集団閉鎖性の問題は、特定の集団を独立に検討したものに限定されていた。その中で、外国での生活経験者によって、日本と外国の生活を比較した回答が得られたことは、さまざまな現象を追究する契機になるだろう。したがって、本研究の結果は、推論された要因を基盤にして、青年期前期における仲間関係の発達や、その展開に及ぼす集団適応を規定する要因を探る上で意義があると思われる。

謝辞：本研究の調査は、平成14-15年度科学研究費補助金・若手研究(B)「部活動における小集団閉鎖性と主将のリーダーシップの関係 (課題番号14710111、研究代表者・吉村育)」の一部として実施されたものである。

引用文献

Aries, E. J., & Johnson, F. L., Close friendship in adulthood: Conversational content between same-sex friends, *Sex Roles*, 1983, 12, 1183-1196.

Coleman, J., & Hendry, L., *The nature of adolescence (3rd)*, 1999, London: Routledge. (白井利明ほか(訳), *青年期の本質*, 2002, 京都: ミネルヴァ書房, Pp.180-189.)

ファーカス, J.・河野守夫, *アメリカの日本人生徒たち: 異文化間教育論*, 1987, 東京: 東京書籍, Pp.202-214.

上瀬由美子, 友人関係, 伊藤裕子(編), *ジェンダーの発達心理学*, 2000, 京都: ミネルヴァ

書房, Pp.140-161.

北山 忍・唐澤真弓 自己：文化心理学的視座，*実験社会心理学研究*，1995，35，133-163.

森田洋司・滝 充・秦 政春・星野周弘・若井 彌一（編），*日本のいじめ：予防・対応に生かすデータ集*，1999，東京：金子書房，Pp.101-112.

中川純子，女ばかりのグループのうちそと，小林哲郎・高石恭子・杉原保史（編），*大学生がカウンセリングを求めるとき：こころのキャンパスガイド*，2000，京都：ミネルヴァ書房，Pp.124-140.

大野木裕明，学校のなかの国際化，宮川充司・坂西友秀・大野木裕明（編），*児童・生徒の発達と学習*，1993，京都：ナカニシヤ出版，Pp.94-100.

坂下英喜，帰国子女の個性は生かされているか，*児童心理*，1988，42(4)，東京：金子書房，113-118.

Sherrod, D., The influence of gender on same-sex friendships, In C. Hendrick (Ed.), *Close relationships*, 1988, Newbury Park, CA: Sage, Pp.164-186.

総務庁青少年対策本部編，*世界の青年との比較から見た日本の青年：第6回世界青年意識調査報告書*，1998，東京：大蔵省印刷局，Pp.41-46.

Tobin, J. J., Wu, D. Y. H., & Davidson, D. H.,

Preschool in three cultures: Japan, China, and the United States, 1989, New Haven: Yale University Press, Pp.188-191.

和田 実，同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連，*心理学研究*，1996，67，232-237.

王 晨，諸外国のいじめの現状2：中国，坂西友秀・岡本祐子（編），*いじめ・いじめられる青少年の心：発達臨床心理学的考察*，2004，京都：北大路書房，P.27.

Wheeler, L., & Nezlek, J., Sex differences in social participation, *Journal of Personality and Social Psychology*, 1977, 35, 742-754.

Yamagishi, T., The provision of a sanctioning system in the United States and Japan, *Social Psychology Quarterly*, 1988, 51, 265-271.

吉村 斉，諸外国のいじめの現状1：韓国，坂西友秀・岡本祐子（編），*いじめ・いじめられる青少年の心：発達臨床心理学的考察*，2004，京都：北大路書房，P.26.

吉村 斉，部活動への適応感に対する部員の対人行動と主将のリーダーシップの関係，*教育心理学研究*，2005，53，151-161.

吉村 斉，中学生の適応感を規定する要因としての対人行動とその性差，*心理学研究*，2007，78，290-296.

